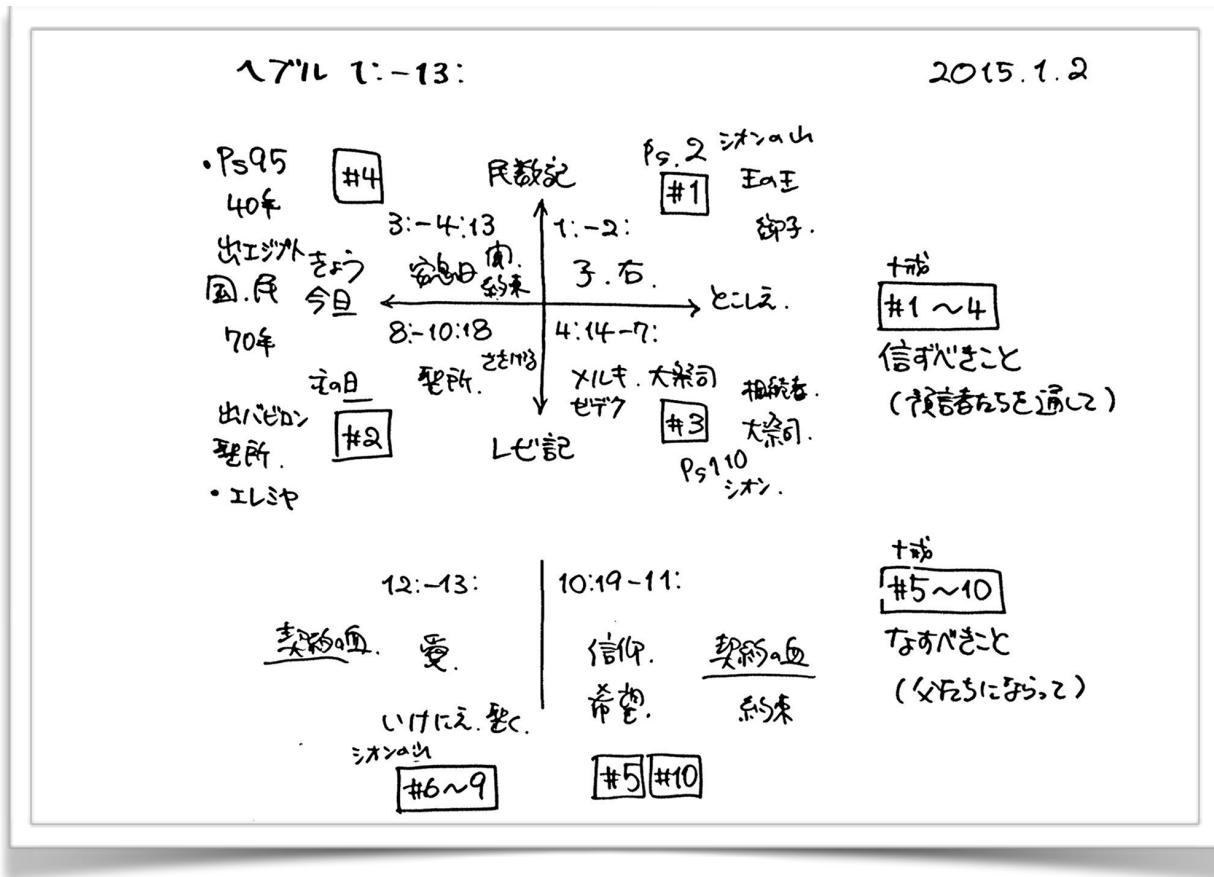




## ヘブル人への手紙1:-13:



ヘブル人への手紙の分析をしています。前回もやりましたが、6つの段落に分かれていることはわかっていたと思います。ただ、どういつながりなのかがはっきりしていませんでした。

最初は1章から2章、次が3章から4章。神の御子であるキリスト、御使いよりも偉大な万物の支配者である御子が来ましたというのが、1章から2章。3章から4章のところは、安息が残っている。「今日と言われている間に聞きなさい。安息は残っていますから」というのが、3章から4章。4章14節からは、メルキデゼクがたくさん出てきます。8章からは、聖所。「主が設けられた真実の幕屋である聖所」というその新しい聖所の話を8章から10章18節まで、ここで捧げ物の話をします。

10章19節からのところで、「だからこうしようではないか」という励ましのことばに入っていきます。5つに分けたときの最初の4つは、「信ずべきこと」ということかなと。10章19節からは、それで、私たちがなすべきことというように分けられるのではないかなと考えました。

1章から4章までのところは、民数記のところを思い出します。御子は王の王となってすべての国を支配する御子がシオンの山の上にいるということ。そして、約束の地に導いていく。

4章14章の3段落目と4段落目は、主は本当の相続者である大祭司である。メルキゼデクの位に等しい大祭司というのは、主からの相続を受ける新しい大祭司である。その新しい大祭司に、新しい聖所とご自分を捧げる捧げ物というのが、8章のところにあります。こちらが、この3番目と4番目の段落は、レビ記の教えに該当しているものかなと思います。

その2つに分けたときに、1番目と2番目、3番目と4番目の段落で、最初のほうは、御子について。次の安息日のところは「今日」と言われている日。3番目のところでまた御子は祭司であると言って、次は主の日について。その日が来る。その日にどうなるかという引用が、エレミヤ書からの引用です。2番目の段落は95篇からの引用が何度も何度もありました。8章からのところは、エレミヤ書からの引用が何度もあります。最初の1番目の右の座についた王の王であるほうは、特に詩篇2篇、シオンの山に上って、すべてを支配するのが御子であるということが強調され、4章14節からのところは、110篇からの引用です。メルキゼデクの話ですから。110篇からの引用が多くて、これもシオンから支配をしているというのが、110篇にも書かれています。

10章19節からのなすべきことというほうは、まずは信仰、約束のものを忍耐をもって待つ信仰について。信仰と希望について。12章と13章のほうは、兄弟を愛しなさい。特に、13章1節のところには「兄弟愛をいつも持つていなさい」と書かれていますけれども、忍耐するのですが、特に不品行とか食べ物とか、欲望とかが12章、13章によく書かれています。

10章19節からのところに、契約の血ということで始まって、13章の終わりも、永遠の契約の羊の大牧者というところに契約の血というテーマが出てきますので、後半の10章19節からのところはなすべきこと。父たちにならってと。

最初のほうは、預言者たちによって語られたことが成就することを信じなさい。先祖たちが何をしたかを覚える後半と、先祖たちに約束されていたことを確認する前半というふうにも分けられると思います。

10章19節からのところは、もう少し分析を進めなければなりませんけれど、「信仰と希望」と「愛」という2つに大きく分けられて、愛のところは、いけにえとか、聖い捧げ物となるようにということを行いますけれど、ここの中にも、私たちはシオンの山に来たというシオンの山のことも書かれています。ですので、次には、10章19節からのところを少し細く見ていくことになると思います。

